

シニア世代の英語学習・ 英語使用についてのナラティブ分析

—— 70代女性の語りに表出されるアイデンティティ ——

山本由実

Abstract

This study analyzes interview narratives of a senior English language user talking about her English learning and use. Recently, learning English is becoming popular as a leisure activity among senior citizens. How to spend their time after retirement is an important issue for them, as it can maintain a sense of life worth living. By conducting qualitative research through an interview, I explore the reality of their English learning. This study provides important suggestions for how English learning can further enrich senior citizens' lives in the future. This study clarifies these two points: (1) the participant's policy of learning and using English is deeply rooted in her experience, and she constructs her identity by emphasizing differences from others in her narratives; and (2) the participant has low-intensity yet positive attitude toward English. Senior citizens like her need open and easy-to access learning settings.

キーワード：英語学習，生涯学習，シニア世代，ナラティブ，アイデンティティ

Keywords : English learning, lifelong learning, senior citizen, narrative, identity

I はじめに

これまで老年期を迎えることは、身体的・精神的に衰弱することであるとして否定的に捉えられてきたが、先進国での高齢化が進み、医療の発達により健康寿命が延びるにつれ、生涯発達心理学や教育老年学の分野を中心に、老いのポジティブな面に注目しようとする考え方が普及しつつある（堀 2018, 70-80）。健康を維持しつつ活動的に過ごすことが可能になったシニア世代¹⁾は、趣味や娯楽を楽しみ、よりアクティブに過ごすようになっている²⁾。老後余暇に行なわれる活動は多岐にわたるが、なかでも学習に関わる活動は認知能力の維持・向上に役立つものとして指摘されている（Verghese et al. 2003, Wang, Xu and Pei 2012, 藤原 2020）。

日本では、近年、老後余暇に英語学習をする人々が増えている。それに伴い、民間英会話スクールでシニア向けの英会話コースが設置されたり、公民館などを使って市民英語講座が開講されたり、シニアを対象とした英語教材も書店に並び始めている。しかし、シニア対象の英語教授法及び英語教材についての議論は十分なされていない³⁾。これらの英会話学習サービ

スの内容や提供の仕方について、シニア世代の実態を検証することも含め、さらなる議論が望まれるところである。

本研究は社会言語学の観点から、シニア世代のインタビュー・ナラティブを分析し、彼らが英語学習経験をどのように認識しているのか、英語を学習したり使用したりすることを自らの人生にどのように位置づけているのかについて質的な側面から探るものである。老後余暇という人々の生きがいに通じる精神的なものに関わる事象を扱う際には、量的な研究のみならず、個々の事例についての質的なアプローチによる理解が重要になると考える。それは今後、老後余暇としての英語学習をさらに充実させるために、重要な示唆を与えるものになるだろう。本研究では、シニア世代の英語学習・英語使用者を研究対象者とし、調査者との二者間インタビューにおいて語られるライフストーリー⁴⁾を分析する。そのことにより、(1) 研究協力者が英語学習や英語使用の体験を語る中で、自己のアイデンティティをどう捉えているか、(2) 研究協力者の英語学習・英語使用についてどのような特性が見られたか、の二点を明らかにする。

II 先行研究

多くの国や地域でシニア世代を対象とした教育サービスが展開されているが、その現状や効果などを検証した研究はそれほど多くない。加えて、英語学習に関する研究については、英米圏では移民の第二言語習得が主要なテーマになってしまい、老後余暇の使い道としての英語学習という本論文の関心からは外れてしまう。また、日本国内の英語教育に関する分野で行なわれてきた議論は、初等・中等及び高等教育機関での外国語習得理論や指導法に関するものが主であり、成人、とりわけシニア世代の英語学習についてはあまり議論の俎上に上がらず、等閑視されてきたと言える。

日本を対象としたシニア世代を含めた成人の英語学習に関する実態調査研究としては、遠藤(2005)や田上(2005)による、20歳から60歳以上の年齢層を対象とした英語学習の動機や学習方法などに関するアンケート調査があり、年代別の相違が浮き彫りにされている。シニアの英語学習に特化したものとしては、実際に自らが50歳以上の10人に英語を教える糸井(2005)が、若い世代とは異なる学習動機やニーズに気づき、シニアに適した学習環境について提言している。しかしながら、いずれの研究も量的調査を中心に分析されており、シニア世代の個々の状況について踏み込んで議論されてはいない。老後余暇の過ごし方は彼らの生きがいに繋がる問題であり、彼らの思考や経験、アイデンティティに深く関連するため、量的理解では十分ではない。そこで本研究では、ナラティブ分析を用いて質的な検証を行なうことにより、彼らの経験や学ブプロセスに焦点を当て、シニアの英語学習・英語使用の実態を探るものである。

シニアの英語学習にまつわるナラティブ分析を行なった先行研究は、国内では管見の限り見られない。そこで本研究では、個々の学習者の状況や経験について語ってもらい、そのインタビュー・ナラティブを分析することにより、量的調査では零れ落ちてしまう声を拾い検証したい。彼らのアイデンティティや価値観がどのように表出されているかを詳細に分析することで、シニア世代が英語学習・英語使用の体験をどのように位置づけているのかについて明らかにする。

III データの基本情報と分析方法

1 データの基本情報

本研究で使用するデータは、英語学習や英語使用にまつわる経験について、調査者が研究協力者であるタミ子（仮名）に尋ねる二者間インタビューの録音・録画を書き起こしたものの一部である。このインタビューは半構造化インタビューの形式で行なわれた。調査者があらかじめ用意したいくつかの質問（付録1参照）に加え、研究協力者の回答によって、更に掘り下げた内容や関連した事柄について尋ねる質問とそれらへの回答を含む談話である。インタビューは調査者が何度も訪れたことのあるタミ子の自宅で、2018年12月に1時間程かけて行なわれた。以下にタミ子と調査者の簡単なプロフィールを示す。

タミ子（77歳 インタビュー当時）

- ・夫と二人暮らし、一人娘は結婚を機に県外で暮らしている
- ・約20年間、主に大学生（留学生含む）向けの下宿を営んでいる
- ・中学校から大学までキリスト教の一貫校に通う（本人は高校卒業後洗礼を受ける）
- ・大学卒業後英語学習はやめていたが、65歳から英会話に通い始めた
- ・現在、特別な英語学習はしていないが、時々英語を使用している

調査者（36歳 インタビュー当時）

- ・以前、タミ子の営む下宿に住んでおり、タミ子と知り合ってから8年程になる
- ・幼少期から中学生頃まで、教会学校で英会話を習っており、聖書の話も学んでいた
- ・タミ子とともに教会の日曜礼拝に頻繁に参加していた時期もあった
- ・小学校、中学校、高等学校で英語教員としての経験があり、現在は大学で英語を教えている

調査者とタミ子は40歳ほど年が離れているが、親しい友人関係にあり、既にラポール（信頼関係）は築かれている。タミ子は、調査者が英語教員として働いている（いた）ことを知っており、調査者がかつてミッション系の学校で教えていたことを好意的に受け止めていることがこのインタビューでも語られている。二人の共通点として挙げられる「英語」と「キリスト教」は、タミ子がライフストーリーを語るうえでのキーワードになっているのだが、彼女はこれらについて、調査者も同様にポジティブなイメージを持っていると認識している。

2 分析方法

本論文では、談話分析の一手法を用い、英語学習・英語使用をしているシニア女性のインタビュー・ナラティブを分析する。本論文で扱うナラティブとは、インタビューの中で話し手と聞き手が相互行為的に構築する語りを指す。ナラティブは、同じ話し手によって語られるひとつの事象であっても、話し手の解釈や視点が異なればその都度違ったものになり、語られる機会によって異なるものとなる。また、そのナラティブは聞き手の参与の影響を受けながら、インタビューの過程で生成されるものである（De Fina and Georgakopoulou 2012, 秦・岡本・井出

2019)。相互行為的な語りを分析するため、分析の範囲は話し手の語る内容だけでなく、その語り方にも及ぶ。

このようなナラティブの捉え方は、1990年代前半から起こったナラティブ・ターン（物語的転回）という現象の流れを汲むものである。ナラティブ・ターンとは、語られたことや語られ方を中心に研究分析がなされるという潮流のことを指し、「客観的・理性的・絶対的な事実（世界）はそもそも存在しえないもので、それを語る人間によって構築されるものである」（秦・村田2020: iii）という考え方に依拠している。現在では、社会学や社会人類学、言語人類学、また医療や看護、心理学などの分野において、こうした視座からのナラティブ分析を行なうことが主流になっている。

こうして話し手の語る内容や語り方に焦点を当てることにより、語りの構造や聞き手との対話の中で表出される価値観やアイデンティティなどを分析の対象とすることが可能になった。話し手がライフストーリーを語る過程で、過去の出来事についてその都度解釈をし直し、自らを取り巻く文化や社会的規範、他者との関係において自己を位置付ける様子を観察する。そのことにより、話し手の語りの中に見られる社会文化的な慣習や規範、思想、そしてそこから立ち現れてくるアイデンティティを分析することができるのである。

本論文では、研究協力者であるシニア英語使用者が自らのアイデンティティと英語をどのように結びつけているのかを探ることが研究の重要な鍵になる。老後余暇をどのように過ごすかということは、その人の人生観や自己や友人、社会に対する認識に深く関連するからである。彼らがなぜ老後に英語学習・英語使用をしているのかについて明らかにすることができれば、日本社会においてますます身近になっている英語を、よりよい老後を過ごすための選択肢の一つとして提示できるだろう。

研究協力者のアイデンティティを探るため、本論文ではとりわけ Bamberg のポジショニング理論（Bamberg 1997, Bamberg and Georgakopoulou 2008, De Fina and Georgakopoulou 2012）を分析の枠組みとしたい。アイデンティティ構築を読み解く上でポジショニングを用いる手法は、Davies and Harré（1990）が提唱し、後に Bamberg が相互行為研究に導入した。この分析モデルでは、過去の出来事（物語）がどのように表現されているかということではなく、話し手がインタビューという相互行為の中で、自己（self）やアイデンティティ、及び自分が何者であるのか（who I am）をどのように伝えているかに着目する。

Bamberg のポジショニング理論は、ナラティブを3つのポジショニングレベルに分ける。まずレベル1は、「報告されたイベント内で、登場人物たちがお互いの関係性の中でどう位置付けられているか」という、話し手が物語る過去の出来事についての語りである。話し手が、過去の出来事の中で自己をどのように認識しているかが明らかにされる。次にレベル2は、聞き手との関係において「今—ここ」で繰り広げられる「話し手が聞き手に対して自分自身をどう位置付けているか」という語りである。ここでは、話し手が聞き手にどう見られたいかといった両者の関係性に関わる事柄が検証される。そしてレベル3は、話し手が「自分自身に対して、自己をどのように位置付けているか」という語りであり、これはインタビューの場を離れても持続される自己のアイデンティティに関係するものである。これは、レベル1, 2を踏まえて検証される。本論文も Bamberg の区分に従い、ナラティブを3つのレベルに整理して分析を進める。

また、相互行為的な語りの中で話し手がどのようにアイデンティティを構築しているかを読み解く際、Bamberg (2011, 2012) の3つのジレンマという概念を用いて考察する。一つ目のジレンマは、話し手が他者との同質性／異質性を強調することで自らのアイデンティティを表出しているかどうかということである。二つ目はナラティブ内の登場人物である自らを、語りの中の出来事に主体的／受動的に関わる者として位置付けているかという点である。そして三つ目は、過去からの連続性／非連続性を示すことで自らを描出しているかどうかという点である (Bamberg 2012, 秦・村田 2020)。これらの分類を用いて、研究協力者が他者や周りとの関係においてどのように自己を位置づけ、自らのアイデンティティを構築しているのかを分析する。

IV データと分析

本章では、全部で4つのデータを紹介する。データ1では、タミ子のアイデンティティの根幹をなす英語とキリスト教文化との関わりが特徴的な語りを見る。データ2は、彼女の高校生時代の外国人家族との交流体験について、さらに一続きのデータであるデータ3及びデータ4では、それぞれシニア英会話クラブの友人と自分との比較、現在の英語使用についてのナラティブ・データを紹介し、語りの中で構築されるアイデンティティを詳察する。インタビューは予め用意しておいたいくつかの決まった質問（付録1参照）と自由な形式の話からなる半構造化インタビューの形式で行なった。インタビュー内で登場する固有名詞は全て仮名、仮称を用いている。トランスクリプト内の記号については、付録2を参照されたい。

1 英語とキリスト教文化

データ1はインタビュー序盤において調査者が、初めて英語を習ったのはいつかについて尋ねた返答として語られたものの一部である。タミ子はミッションスクールである中学校の授業で初めて英語を学んだ。

データ1

- 1 調査者：まず初めに英語を習ったのは：中学校[ですか？]
- 2 タミ子： [はいそうです中学から]
- 3 調査者：中学校から(.)
- 4 タミ子：はい
- 5 調査者：そのときのなんか(.)あの記憶とかありますか？
- 6 タミ子：ええあの一週間に一ぺん(.)牧師さんに英会話を習っ1時間習って
- 7 調査者：あ(.)それは学校じゃなくて：
- 8 タミ子：学校で
- 9 調査者：あ学校で？
- 10 タミ子：はい
- 11 調査者：あ(.)金陵？
- 12 タミ子： [中(.)金陵学院(.)ミッションスクールだから]

- 13 (..)
- 14 調査者: 金[陵:(言いながらノートに書いている)
- 15 タミ子: [英会話の時間が1時間ありました=
- 16 調査者: =°週に一回°(.)なんか覚えてますか?>面白かったとか<
- 17 タミ子: あ(.)それは先生が牧師先生だもんですから=
- 18 調査者: =°う:ん°
- 19 タミ子: 中学生程度の英会話が(.)できれば¥世界中行けるといいました¥
- 20 調査者: ふ:[ん(タミ子の方を向く)(.)¥うんうんうん¥
- 21 タミ子: [@@(調査者に視線を合わせて)

データ1には、タミ子の価値観、認識を読み解くうえで念頭に置いておくべき重要な要素が二つある。まず、「中学生程度の英会話」(19行目)ができれば、十分コミュニケーションが取れるという価値観である。これは中学校で英会話(英語科)を担当していた牧師先生から言われた言葉であり、タミ子の英語使用のよりどころとなっている。例えば、大学卒業後にカナダ、アメリカを旅行した際にも「中学のときの英会話の先生が中学程度の英語で世界中周れるっていうのを信じて」旅行したと言い、他の箇所でも「勉強してないから度胸だけで」(データ3, 14行目)、「ほんの少しの単語でね」(データ4, 65行目)などという表現を使って、限定的な語彙や表現で英語使用を行なっていることが繰り返し言及される。彼女は、自分の英語力が中学校程度の簡単な表現に限定されていることを、悲しむべきこととしてではなく、むしろ肯定的に評価している。これは現在の英語使用に対する姿勢にも、変わらず見られるものである。

もう一つは、キリスト教文化に関するものと英語を同一視していることである。例えば、「ミッションスクールだから」(12行目)、「英会話の時間が1時間」(15行目)あった、と他と比べて大きな声で順接の接続詞「だから」を使って強調しながら説明している。キリスト教にもとづく教育を行なうミッションスクールであることが、教育課程に英語の授業が組み込まれていることの根拠として述べられる。また、17行目では、調査者に英語の授業で覚えていることを尋ねられ、「それは先生が牧師先生だもんですから」(17行目)、「中学生程度の英会話が(.)できれば¥世界中行けるといいました¥」(19行目)と、再び順接の接続詞「だもんですから」を使い、因果関係を示しながら説明する。「世界中行けるといいました」は笑いながらの発話であり、直後に調査者の笑いを伴う同意が示され、タミ子も笑いに応じている。ここでは、英語と深く関係のあるキリスト教の牧師先生だからこそ、「中学生程度の英会話」の能力があれば世界中でコミュニケーションを取れることを知っており、生徒たちにそれを伝えているということだと解釈できる。タミ子にとって、キリスト教文化に関わるものや人が、英語に関連が深いものとして受け止められていると推測される。

インタビューの他の箇所でも、大学卒業後の英語学習について、特に英語の勉強をしていたわけではないが、「父がYMCAの会員」で「妹が英文科で勉強していた」ため、「英語ということに対していつも興味を持っていた」と話している。妹の専攻については本人と直接関係はなく、また時々参加していたというYMCAのイベントについても、日本人会員のみによって行なわれていたと説明されているため、英語と直接の関係はないはずである。しかしその語りからは、

- 29 調査者: う:[ん(何度か小さく頷きながら)
- 30 タミ子: [それでや:h外人が来たらいやいや(目を閉じて頭を横に何度か振りながら)って
感じて(..)
- 31 調査者: う:ん
- 32 タミ子: 喋らなかったのが
- 33 調査者: うんうん
- 34 タミ子: ちょっとそういう(.)子ども達と遊んでたから(調査者の顔を見て頷きながら)
- 35 調査者: うん
- 36 タミ子: それで学校にもその(.)宣教師の(.)hアメリカ人の先生がいたし
- 37 調査者: あ:
- 38 タミ子: うん
- 39 調査者: °そうですね°
- 40 タミ子: h宣教師ですからキリスト教を教えに来てる先生なん↑ですね
- 41 そういう人たちと触れ合う機会はちょっとあったん↑ですね(.)
- 42 調査者: う:ん=
- 43 タミ子: =だから(.)あんまりシャイ<ではなかったです>h
- 44 調査者: う:ん
- 45 タミ子: 平気で[した
- 46 調査者: [それは:他の:あの:おんなじ学年の子達も(.)
- 47 結構外国人に対してはそんなにシャイじゃないっていう感じでしたか?
- 48 [金陵の
- 49 タミ子: [そうですね:
- 50 だけどあの(.)英会話クラブがクラブ活動であるん↑ですね(.)
- 51 そういうのにそくしてる人<属してる>人は(.)もっと上手だったと思いますが
- 52 調査者: あ:
- 53 タミ子: 私難しいディフィカルトなのは(.) (言ってから調査者の方を向く)@全然(..)ようやら
なかったから
- 54 調査者: ん:おばさんは(.)英会話クラブには入ってなかった=
- 55 タミ子: =入りかけたんですけどECCとか=
- 56 調査者: =@@@
- 57 タミ子: [(.)すぐやめちゃ°いました°
- 58 調査者: あ:まあやっぱりなんか中:高の英会話クラブは英語がすごい得意な子が入ってるよう
ないイメージが@
- 59 タミ子: @¥そそそそそうなんです¥

ここでは、タミ子が高校生時代に経験したアメリカ人家族との交流について、「ジョーイ」や「ケリー」といった固有名詞が登場し、子どもたちと一緒に遊んだことが語られている。調査者の「へ:じゃこの:人たちと:英語で喋ったりとか」(2行目)との問いかけに、タミ子は「少¥しね¥」(3

行目)と笑いながら応答し、彼らと遊ぶ中で使っていた言語は英語だと特定された。また、続く調査者の「この人たちは日本語も喋れるんですか?」(6行目)に、「hそんなに喋れないと思う」(7行目)とタミ子は頭を横に大きく振るジェスチャーを使って否定することで、これらの子どもたちは日本語を話していなかったことが強調された。しかし直後に、調査者が「じゃあやっぱり英語:を使って:」(9行目)と使用された言語について再度確認しようとする、その問いには答えず、遊びの内容(10-20行目)にすり替えて返答としている。これは、幼い子どもとの遊びの中ではそれほど多くの言語を使う必要が無く、恐らくあまり会話をしていなかったために、正面からの返答を避け、遊びの内容を語る方向に向かったものと思われる。何をして遊んだかについては、調査者の「↑ままごととか」(16行目)及び「↑かくれんぼとか」(18行目)の問いかけに即答で同意している。

1～20行目の過去の出来事について語る部分を Bamberg (1997) のポジショニング理論に当てはめると、レベル1とレベル2が入り混じっていると言えるだろう。タミ子が自分や自分を取りまく人々を物語の登場人物として語る(レベル1)最中に、調査者が割り込む形で次々と質問を投げかけ、タミ子が応答している(レベル2)。こうして、データ2抜粋以前から続く近隣の外国人家族との交流の話は、割り込みや中断を経て、20行目で、「少しね(0.5)交流がありました」とまとめられる。これは Labov and Waletzky の提示したナラティブの要素⁵⁾のうち「終結部(coda)」(Labov 1972)にあたると思われる。タミ子は、一息ついた後に「交流がありました」(20行目)と締めくくることによって、アメリカ人家族との交流についての物語世界での話を終わらせている。

この話の後、調査者が、子ども時代に外国人と交流した人としていない人を比較するフレームを提示すると、タミ子は一般的な日本人の英語に対する態度への評価を示す。この部分は、ポジショニングレベル2にあたる語りが展開されている。話し手が聞き手とインタビューを行なう「今-ここ」の場(レベル2)において、タミ子は自己のアイデンティティをどのように構築しているだろうか。調査者の「う:んでもこういうのやったことない人と(.)やったことある人だったらやっぱり全然(.)」(21行目)、「英語とかねえ=」(23行目)の問いかけに、タミ子も「=そうそう」(24行目)とラッチングで間髪入れずに肯定の返事で応じる。そして、調査者の言葉に被せるように「抵抗がねえ」(26行目)、「日本人は(.)どうしても(.)日本語しか喋れないシャイな気持ちがすごくあってね(.)<日本人は昔から>」(28行目)と続け、外国人に対して積極的にコミュニケーションを取ろうとしない日本人一般に対する評価を表明する。最後の部分は早口で付け加えられ、日本人が昔からシャイだったのは過去にも遡るとされる。さらに、調査者の頷きを伴う同意を受け、「外人が来たらいやいやって感じで」(29行目)とジェスチャーをしながら語る。インタビューを通して、タミ子は殆ど動かず話しているため、この動きは際立って見える。彼女は拒否するように目を閉じ、首を左右に振ることで、外国人とコミュニケーションを取ることに拒否反応を示す想像上の日本人の動作を、物語世界の登場人物の視点(C-VPT: character's viewpoint)⁶⁾から演劇的なやり方で表現する(McNeil 1992, 喜多 2002)。ただ、このジェスチャーを伴う発話の間、調査者はタミ子の方を見てはいない。彼女はそれを知っていると思われることから、このジェスチャーは調査者に視覚的に強調するために行なったのではなく、自分の心的イメージがひとりだけで表現されたものだと考えられる⁷⁾。

続く語りでは、そうした日本人とは対照的に、自分はアメリカ人の「子ども達と遊んで」(34行目)いたし、学校にも「宣教師の(.)hアメリカ人の先生がいた」(36行目)ため「あんまりシャイではなかった」(43行目)と自分自身を評価している。これについては、Bamberg (2011, 2012) の提唱するアイデンティティ構築の3つのジレンマを援用して読み解くことができる。タミ子の語りには、この3つのジレンマのうち一つ目の、他者との同質性／異質性を強調することで自らを特徴づけるという行為が見られる。タミ子は自らの体験を根拠とし、「日本人」と自分自身とを峻別し、差異を強調することで自己のアイデンティティを構築していることがわかる。

タミ子の語り全体から立ち現れてくるのは、子ども時代に置かれた環境や自らの体験にもとづいた、英語を使ったコミュニケーション志向である。これはポジショニングレベル3にあたり、インタビューの場を離れても変わらずにあるものと推測される。外国人の子どもたちとの交流やアメリカ人宣教師が身近にいたことを根拠に、自身は「あんまりシャイではなかった」(43行目)と結論づける。46-49行目で話題にされる高校の同級生についても、自身と同様に外国人に対してシャイではなかったと認め、同じ属性を持つ者として位置付けていることがわかる。つまり身近に外国人がいた環境にあった者は、外国人に対してコミュニケーションをとることに抵抗を感じないという認識を持っていると言える。

このように、タミ子は幼い頃からキリスト教文化に触れ、外国人宣教師との関わりや、近隣の進駐軍居住エリアに住むアメリカ人家族と過ごした経験により、外国人とコミュニケーションを取る際の「抵抗」(26行目)を感じていないと自らの過去を物語る。その体験について調査者が、幼少時に異文化交流をした者としていない者の二項対立の比較軸を持ち出すと、一般的な日本人を「日本語(.)しか喋れないシャイな気持ちさがすごく」(28行目)あると評価し、外国人とのコミュニケーションに物怖じしない自分というアイデンティティを構築していく様子が見られた。

3 シニア英語学習者間の対比によって現れるアイデンティティ

次に見ていくのは、大学卒業後、英語から遠ざかっていたタミ子が65歳頃に再開した英語学習についての語り(データ3)である。この抜粋箇所の前には、友人の勧めによりコミュニティセンターで英会話クラブに通うことになった経緯が語られている。その後、調査者の記憶違いから、話題はタミ子の若い頃のカナダ、アメリカ旅行の話に移ってしまい、英語を使って旅したスモール・ストーリー⁸⁾が挿入された。タミ子の「それでその:65から6年くらい習いまして英会話」(1行目)で、本筋であったシニア英会話クラブの話に戻る。

データ3

- 1 タミ子: それでその:65から6年くらい習いまして英会話
- 2 調査者: 6ね[ん?]
- 3 タミ子: [毎週1時間くらい]
- 4 調査者: うんうんうん(2.0)へ:
- 5 タミ子: そのこときも:(.)

- 6 調査者: うん
- 7 タミ子: もう一人のかの友達は(.)あの高校ですごく英語の勉強したんですよ
- 8 文章をだいたい(.)文章中心に(.)[文法から
- 9 調査者: [うんうんうんうん
- 10 タミ子: それだからもう:(.)文は上手なんですけどh喋るのに口が動かなくて
- 11 調査者: う[:ん
- 12 タミ子: [もごもご
- 13 調査者: う:んうん[うんうんうんうんうん
- 14 タミ子: [私は全然あたま@h勉強してないから(.)度胸だけで@@う:ん喋ってました°
- 15 調査者: [(タミ子の方を見る)ふ:ん
- 16 なんかお婆さんの:[そのときの:ノートを私は持っていて
- 17 タミ子: [はい はい
- 18 [@@
- 19 調査者: [@@なんかすごい単語とかフレーズとかを<いっぱい書いてました>(.)うん
- 20 タミ子: @@
- 21 調査者: そそそれなんか返さなきゃと思ってずっと持ってい@@
- 22 ね(.)う:ん(.)6年続けて(.)んで
- 23 ダニエルが帰っちゃったから:終わっちゃったんですね[そのときには
- 24 タミ子: [そうです:
- 25 調査者: う:んそっか
- 26 タミ子: ちょっとわたしは続けたかったけどもう一人の彼女が(.)もう¥やめたって言って¥
- 27 調査者: う[:ん
- 28 タミ子: [ぶっつりやめちゃったもんだから°=
- 29 調査者: =じゃそれからは先生にはつかずに:
- 30 タミ子: ええ, ええ
- 31 調査者: 自分でやってるていう
- 32 タミ子: それがねえあ:まあ(.)彼女は(.)あの(.)ダニエルに(.)メールを(.)英語で(.)
- 33 24時間かかって作ったいうのを送ったりしてましたけど
- 34 調査者: ふ:ん
- 35 タミ子: 根気よくね
- 36 調査者: うんうんうんうん
- 37 タミ子: わたしはもう(..)お付き合いなくなって
- 38 調査者: うん

7行目から14行目にかけて, 一緒に英会話を習っていた友人と自分を対比する形で, 英語学習についての語りを展開される。友人は「高校ですごく英語の勉強」(7行目)をして, 「文章中心に(.)文法から」(8行目)学習しており, 「それだからもう:文は上手なんですけど喋るのに口が動かな」(10行目)いと言う。自分自身については, 友人と対照的に, 「全然あたま @h 勉

強してないから(.)度胸だけで@@う:ん°喋ってました°」(14行目)と、笑いを差し挟みながら、間違いは気にせず英語を話す自分の姿を描写する。1980年前後以降の日本の英語教育では、文法知識よりもオーラルコミュニケーションが重視されていた(江利川 2012: 22-23)ことに鑑みると、タミ子が、「度胸だけで」(14行目)「喋って」(14行目)いたことを肯定的に捉えるのは自然なことに思える。加えて、データ1で見た、牧師先生の「中学校程度の英語力があれば世界中周れる」といった価値観が内面化されているため、文法の正確さや文章を予め作ることに拘泥して目の前の人とコミュニケーションを図ることができない友人の様子は、タミ子の眼にはもどかしいものとして映ったかもしれない。その気持ちが「もごもご」(12行目)という擬態語に表れているのではないか。

また、「ダニエルが帰っちゃったから:終わっちゃったんですねそのときには」(23行目)から本筋に関わる話が再開されると、シニア英会話話が終わりを迎えた顛末が簡単に語られる。ここでも再び、友人の英語使用に関するスモール・ストーリーが挿入される。調査者がタミ子のその後の学習について、独学でやっているのかという意味の断定の形をとった質問(31行目)を投げかけると、タミ子は自分自身の学習についてではなく、友人についての話を始める。友人が24時間かけて英文メールを書いた話をし、「根気よくね」(35行目)と付け加え、先程と同じように文章や文法は得意であるが面と向かっての会話は苦手な友人についてのエピソードが挿入される。

データ3では、ポジショニングレベル1にあたる物語世界で、65歳になって始めた英会話クラブの活動の様子が語られた。その中で、もう一人の登場人物である友人の態度に対して、自分とは対照的な英語の学び方をする者として否定的な評価がなされた。データ2の語りでは、「日本語しか喋れないシャイな」昔ながらの日本人と自分を対比させていたが、データ3では友人を自分と対照的な人物として描いている。7行目から14行目、及び32行目から37行目にかけての語りは、友人と自分を対照的に描写することによって、自らの立ち位置を際立たせるものになっている。Bamberg (2012, 204) が指摘しているように、他者を自己と同質なものとして見るか異質なものとして見るかということはその時々 (moment-to-moment) で絶えず変化するプロセスであり、他者と自分を物語りに登場させることは自己のアイデンティティ構築に有効な方法である。タミ子は再度、自身と比較する対象を持ち出し、他者との差異を強調し、他者との境界線を引き直すことで、再び自己のアイデンティティを構築していることがわかる。

4 英語使用についての語りに見られるアイデンティティ

次に、データ3に続く部分の語りを見ていく。データ3、データ4は一続きのものであるが、分析の都合上二つに分割している。データ4の行番号はデータ3から連続して記載する。

データ4

39 タミ子: そいで後はあの(0.5)hあの:病院何回か病気で入院したんですね

40 調査者: うん(頷きながら)

41 タミ子: でリハビリ(,)テーション

42 調査者: うんうん

- 43 タミ子：あのZ病院というところに入院したときに(.)
- 44 たまたまフィリピーナの(.)あのお嬢さんが3人ほど(.)看護師として入ってたの
- 45 調査者：うんうんうん
- 46 タミ子：で大体夜勤が多かつゝたんですが<(1.0)あの:英語が喋れるから
- 47 調査者：う:ん
- 48 タミ子：フィリピン人でこ[と
- 49 調査者： [うんうんうん
- 50 タミ子：それだから(.)あ(..)あ(2.0)hエリーさんとか(.)hいろんな方いらして(.)あ:あ
たしが英語でね
- 51 調査者：うん
- 52 タミ子：グドゥモーニングとかね
- 53 調査者：うん
- 54 タミ子：ハワユーとかね(.)ファインとか()あ(.)シーヤゲンとかいうと
- 55 調査者：°うん°(タミ子の方を見て)=
- 56 タミ子：=あ(.)彼女たちも答えてくれて
- 57 調査者：う:ん(タミ子の方を見て頷きながら)=
- 58 タミ子：=う:ん(4.0)
- 59 グンナイていうとウェウカムとか言って[@@
- 60 調査者： [@@
- 61 タミ子：明日の朝大丈夫よとかね(.)そういう風な言い方で¥
- 62 調査者：@うんうんうん
- 63 タミ子：¥言ってくれて(.)アーユータイヤード?
¥アリトゥとか言って¥(首を斜めに傾げ)[@@(調査者を見て)
- 64 調査者： [あ:@@
- 65 タミ子：その程度の(.)ほんの少しの単語でね
- 66 調査者：う:ん
- 67 タミ子：喋ってましたけどね(笑顔で)
- 68 調査者：へ:
- 69 タミ子：看護婦さんにはびっくりされて(.)h=
- 70 調査者：=うんうん[うんうん
- 71 タミ子： [自分たち全然(首を細かく左右に振って)喋ることしてないとか言って
- 72 調査者：@@

シニア英会話クラブの幕切れについての語りの後、話は、タミ子の入院先での英語使用のエピソードに移り、52行目から63行目で実際に使用されたフレーズを用いて声色を変え、芝居めいた形で語られる。特に、フィリピン人看護師に疲れたか聞かれ、「¥アリトゥとか言って¥」(63行目)と返答する場面では、笑顔で首を斜めに傾げて物語世界での自分のしぐさを再現し、ここでも McNeil (1992) の指摘した物語世界の登場人物の視点 (C-VPT) からの語りが行われて

いる。フィリピン人介護士とのやりとりを実際に話している英語の発音で、ときに体の動きを交えながら語ることで、臨場感のある語りを展開し、過去の場面を再現している（ポジショニングレベル1）。

調査者とのインタビューの場での自己の位置づけに注目してみると、「その程度の（.）ほんの少しの単語でね」（65行目）と、フィリピン人介護士とのやりとりに使われた語彙が限定されたものであることがわかる。これは、調査者の「英語教員」としての属性を意識しての発言ともとれる。データ4の後も、フィリピン人介護士との会話について「片言で喋ってたら」、「実は喋れないから、あんまり」、「そういう単純な言葉しか私喋れない」とネガティブな表現で自分の英会話について評する。振り返って確認してみると、データ2でも「私難しいディフィカルトなのは（.）（言うてから調査者の方を向く）@全然（..）ようやらなかったから」（データ2, 53行目）と、調査者の反応を気にしながら自身の英語力について言及している。同じくデータ2で近所に住むアメリカ人の子どもたちと遊ぶ際の使用言語について詳細を尋ねたとき、正面から回答しなかった（データ2, 9-13行目）のも、タミ子が調査者を英語教育のエキスパートとして位置づけ、言語に関する質問に答えることを回避したとも考えられる。このように、「今-ここ」で自己を位置付けるポジショニングレベル2においては、彼女は自分自身を調査者と対置し、限られた英語力を駆使してコミュニケーションを取る存在として位置づけている。

この物語の締めくくりとしては、その会話を見聞きしていた第三者である「看護婦さん」（69行目）を登場させ、「自分たち喋ることしてないとか言って」（71行目）感嘆する様子を描写することによって自らの英語使用に対する態度への評価としている。「看護婦さん」を自己と対置することにより、外国人と臆することなくコミュニケーションを試みるユニークな存在として自己のアイデンティティを表出している。

データ3、データ4の語りにも共通して浮かび上がってきたのは、簡単な英語で外国人と気軽にコミュニケーションをとることを楽しむタミ子の姿だった。その英語使用の機会はわざわざ自分で用意したものではなく、前者の場合は友人に誘われて始めた英会話クラブであり、外国人講師が帰国したことで終了すると新しく習おうとはせず（データ2, 23-31行目）、後者は入院先でたまたま担当になった外国人介護士と会話をするというものだ。タミ子の英語使用は外国人が近くに居合わせたときに起こる。その行動はその場だけを切り取って見ると自発的であるが、わざわざその機会を得るために努力しているわけではない。また、タミ子は自己のアイデンティティについて、物語世界において、英語を話そうとしない他者、英語を話せない他者を自己と差異化し、対置するものとして肯定的に位置付けている。それは自身の英語力が相対的に見て高くないという認識をもってしても、揺るぎないものであった。

5 考察

本章ではまず、4つのデータの内容と、各データ内の語りにおいてどのようにアイデンティティ構築がなされたのかを簡単にまとめつつ、本論文の問いに答えることにする。以下に本論文のリサーチクエスチョンを再掲する。

(1) 研究協力者が英語学習や英語使用の体験を語る中で、自己のアイデンティティをどう捉えているか

(2) 研究協力者の英語学習・英語使用についてどのような特性が見られたか

データ1では、タミ子の英語使用の際の信条となる「簡単な英語でコミュニケーションを取る」という方針の発端となった出来事が語られた。タミ子は、中学校で初めて英語を教わった。そのとき、英語担当の牧師先生に、「中学生程度の英会話」（データ1, 19行目）ができれば世界中で通用するという意味のことを言われたことを今も鮮明に覚えており、インタビュー内では、英語を使う度にその言葉を思い出して実践している様子が語られた。また、ここではキリスト教文化と英語を半ば同一視する語が見られ、タミ子の認識において両者は親和性の高いものだということがわかった。ミッションスクールの一貫校に通い、クリスチャンであるタミ子にとってキリスト教文化は自身の生活、人生と一体化したものである。そのことから、キリスト教文化と密接につながりをもつ英語はタミ子にとって切っても切り離せない自己のアイデンティティの一部となっていることが推測される。

データ2では、高校生の頃のアメリカ人家族の子どもたちとの交流について語られ、外国人とコミュニケーションを取ろうとしない「日本人」と外国人との交流体験のある自分とを対置していることが明らかになった。データ3はシニア英会話の経験について、文法や文章を中心に勉強した友人と度胸だけで臆することなく英語を話す自分とを対置し、両者の差異を明確に示していた。データ4では、入院した際に病院で出会ったフィリピン人介護士との会話を、物語世界の登場人物の視点（C-VPT）からのジュスチャーとともに再現した。ここでは、日本人看護師を自分と対置するものとして持ち出し、英語を話す機会があるのに話さない看護師と自分の間に線引きし、自己のアイデンティティを描き出している。

これらから分かることは、タミ子は英語学習・英語使用の体験を物語る中で、自分と同質な者、または異質な者を持ち出すことにより、自分の立ち位置を明確に描き出しているということだ。データ1ではキリスト教文化と英語の親和性ととともに自分がどのような価値観を内在する人物であるかを調査者に向けて描出しており、データ2で言及される同じミッションスクールに通う同級生も自分と同じ側に入る。データ2ではシャイな日本人を、データ3、データ4ではそれぞれシニア英会話クラブの友人、日本人看護師を自らと対置することにより、簡単な英語を使ってコミュニケーションを図ることができる者とできない者に区別している。

今回分析に援用した Bamberg (1997) のポジショニング理論のレベル1にあたる物語世界では、一貫して、データ1で紹介された牧師先生の「中学程度の英語」でのコミュニケーションを実践する姿が語られ、他者との対比において、コミュニケーションに志向する人物として自己を位置付けていた。また、それと同時に、インタビューの場であるレベル2の「今-ここ」では、「英語教師」という属性を持つ調査者に対して、「その程度のほんの少しの単語でね」（データ4, 65行目）などと英語力があまり高くないことを繰り返し断る場面が見られた。しかしそれは、調査者との親しい関係性もあり、レベル3にあたるインタビューの場を離れても続くタミ子のアイデンティティにはそれ程影響を与えていない。タミ子は自己をレベル1と同じく、外国人と英語で話せる場面がある際には、簡単な英語でコミュニケーションを図ろうとする者として自己を肯定的に位置づけている。これがリサーチクエスション(1)への解となろう。

次に、リサーチクエスション(2)については、学習の機会や態度について特徴的な事柄が浮かび上がってきた。シニア世代の場合、若年英語学習者と異なり、受験や就職といった外因

的な圧力がかかることは稀である。そのため、学習の目的も自己実現や社交といった事柄が中心になってくる。高齢期には様々な能力の低下も重要な問題としてあるため、労力を払わず始められ、続けていけることが重要であると思われる。タミ子の場合、シニア英会話は友人に誘われて参加したが、データ3で語られるように外国人講師が帰国し、友人が「やめたって言って」(26行目)「ぶつつりやめ」(28行目)てしまったため、自分もそれきりになってしまい、別の英会話の学習機会を探そうとはしない。また、学習態度については、特別な勉強をするのではなく、今ある語彙を使おうとする姿が見られた。英会話クラブに参加しているときにノートを取ってはいた(データ3, 16-21行目)が、それが無くなってしまっても全く構わないくらい気にしていない。学習への姿勢には、個人差や時期によっての変化はあるだろうが、タミ子のようなシニア世代の人々にとっては、気軽に参加でき、既に持っている知識や技能を生かしながら続けられる環境が理想的だと言える。そのためには、英語学習の機会について、誰もがいつでもすぐ参加できるサービスを、民間や行政が継続的に提供する必要がある。また、その内容については、シニア世代のニーズに合わせて、参加者たちがプロセスを楽しみ取り組めるよう、更なる議論が必要である。

6 結びにかえて

本研究では、70代女性の英語学習・英語使用にまつわるライフストーリーを取り扱った。彼女のナラティブに立ち現れるアイデンティティを考察する中で、新しい知識や技能を、時間をかけ努力して獲得しようとするのではなく、今ある知識や能力を使って楽しむという態度が見られた。また、その機会についても自分から労力をかけて獲得するのではなく、気軽に参加したり、たまたまその状況に置かれたときに楽しんだりという気楽な性格のものだということもわかった。これは学ぶプロセスにより重点を置き学習を行なうというシニア世代に共通する態度だと思われる。英語を学んだり使ったりする過程を楽しんだり、その活動を通して社会的な繋がりを作ったり、維持し続けることが生きがいに繋がる。

本研究の背景には、老後余暇の使い道としての英語学習・英語使用の可能性についての問題意識がある。この数十年の内に、学校教育課程での英語重視や観光客の増加などで英語が身近なものになっていることから、老後にも英語に触れる人々の数は今後ますます増えていくと考えられる。シニア世代の人々が自らのアイデンティティと英語をどのように位置づけているのかを問い、検証を続けていくことは、今後、そのような人々の人生をさらに充実したものにすための方向性を示すことになるはずだ。梨本(1999, 83)が指摘するように、高齢者の社会参加の議論において他の世代からシニア世代のみを切り離して論じることは、結果的に彼らから社会参加の機会を奪うことになりかねないことは確かである。しかしシニア世代特有の問題を問うことによって、高齢化社会において多くの人々が生きがいを持って暮らせる社会の実現の一助となると考える。

【注】

- 1) 総務省(2021)では、65歳以上の人々を「高齢者」としている。総人口に占める高齢者の割合は2021年調査時点で29.1%に上り、日本は世界一高齢化の進む国である。本論文では、この「高齢者」を

より中立的なイメージのある「シニア」、「シニア世代」の呼称を使って論じる。

- 2) 総務省統計局による社会生活基本調査（2016）によると、シニア世代の約76%に上る人々が趣味や娯楽の時間を持っている。
- 3) 高齢者の教育についての議論は堀（2006）に詳しいが、他の世代とは異なるシニア世代のニーズに合わせた教育サービス提供の重要性が示唆され、国内の老人大学等様々な実践も紹介されている。また、高齢者特有の認知能力低下や認知症の予防のための学習療法の観点からは、吉田他（2009）や汐田他（2014）が教育実践とその効果について、谷川・有松（2021）が教材や教材研究について議論を行なっているが、英語教育・英語学習に特化した詳細な議論はまだ十分なされてはいない。
- 4) 桜井・石川（2015）によると、ライフストーリーとは、過去の出来事や行為展開について語られる〈物語世界〉と現在から見た行為の評価などを含む〈ストーリー世界〉の二つの位相からなる。「いかに語ったのか」や「何のために語るのか」に問いの焦点を合わせる、話し手と聞き手の相互行為的な語りである。
- 5) Labov and Waletzky は、人々の語りには構造と体系性があるとし（Labov and Waletzky 1967）、過去のある出来事（物語）についてのナラティブにみられる要素として6つの要素を指摘した。それらは、「ナラティブの主題の要約（abstract）」、「ナラティブの登場人物、いつ、どこで、何が起こったかの提示（orientation）」、「出来事の説明（complicating action）」、「ナラティブの評価（evaluation）」、「結末部（resolution）」、「終結部（coda）」である。そのうち、「結末部」は、物語世界の話の終わりを表し、ナラティブと「今」を繋ぐものである（Labov 1972）。
- 6) McNeil（1992）は、ジェスチャーを分析する際にその視点に注目し、登場人物の視点を通して行なわれるものを「C-VPT: character's viewpoint」を持つジェスチャーとして論じた。C-VPTによって、聞き手は、話し手がその物語の中にいるように感じられる。
- 7) 喜多（2002）によると、「ジェスチャーの機能には、相手にある内容を視覚的に伝えるという『他者指向性』のものだけでなく、ジェスチャーをすることが何らかの意味で話者自身のためになるという『自己指向性』のものもある」と言う（p.8）。この場面では、ジェスチャーの前後で二人の目線は合っていないので、聞き手に向けたものではないと推測されるが、タミ子にとってどのような意味を持つのかは更なる精査が必要である。
- 8) スモール・ストーリー（small stories）とは、インタビューで語られる過去の物語世界での話であるビッグ・ストーリー（big story）に対比される語であり、例えば、インタビューの場で起こっていること、未来や仮定の話、これまで話した事柄へのほのめかしなどが含まれる包括的な用語である（Bamberg 2004, Bamberg and Georgakopoulou 2008, De Fina and Georgakopoulou 2012）。

【参考文献】

- Bamberg, Michael (1997) Positioning between structure and performance. *Journal of narrative and life history* 7 (1-4), 335-342.
- (2004) Talk, small stories, and adolescent identities. *Human development* 25(4): 331-353.
- (2011) Who am I? Narration and its contribution to self and identity. *Theory and psychology* 21 (1): 3-24.
- (2012) Why narrative? *Narrative inquiry* 22(1): 202-210.
- Bamberg, Michael and Alexandra Georgakopoulou (2008) Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text and talk* 28 (3): 377-396.
- Davies, Bronwyn and Ron Harré (1990) Positioning: The discursive construction of selves. *Journal for theory of social behaviour* 20:43-63.
- De Fina, Anna and Alexandra Georgakopoulou (2012) *Analyzing narrative: Discourse and sociolinguistic perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 遠藤昌子(2005)「札幌の成人女性における英語学習の実態調査：生涯学習環境整備の必要性」『札幌大学女子短期大学部紀要』46: 5-27.
- 江利川春雄(2012)「学習英文法の歴史的意義と今日的課題」大津由紀雄(編)『学習英文法を見直したい』10-25. 東京：研究社.
- 藤原佳典(2020)「高齢者の社会参加と健康」牧野篤(編)『人生百年時代の多文化共生』, シリーズ超高齢化社会のデザイン. 東京：東京大学出版会, 62-72.
- 秦かおり・岡本多香子・井出里咲子(2019)『出産・子育てのナラティブ分析：日本人女性の声にみる生き方と社会の形』, オンデマンド版. 大阪：大阪大学出版会.
- 秦かおり・村田和代(編)(2020)『ナラティブ研究の可能性：語りが映し出す世界』東京：ひつじ書房.
- 堀薫夫(2006)『教育老年学の展開』東京：学文社.
- (2018)『生涯発達と生涯学習』, 第2版. 京都：ミネルヴァ書房.
- 糸井江美(2005)「学力の衰えと直面する高齢英語学習者」『教育研究所紀要』14: 41-46.
- 喜多壮太郎(2002)『ジェスチャー：考えるからだ』東京：金子書房.
- Labov, William(1972) *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, William and Waletzky Joshua(1967) Narrative analysis: Oral versions of personal experience. In: Helm June (ed.), *Essays on the verbal and visual arts*. Washington: University of Washington Press.
- McNeil, David(1992) *Hand and mind* Chicago: The University of Chicago Press.
- 梨本雄一郎(1999)「高齢者の社会参加過程における学習の意味：＜活動のつながり＞と＜関係の広がり＞を生み出す組織原理」日本社会教育学会(編)『高齢社会における社会教育の課題』, 日本の社会教育第43集. 東京：東洋館出版社, 74-85.
- 桜井厚・石川良子(2015)『ライフストーリー研究に何ができるか：対話的構築主義の批判的継承』東京：新曜社.
- 汐田梢・五島真一・種子永聡・小山敬子(2014)「学校形式の介護老人保健施設における入所者の意欲向上と身体的改善」『日本老年医学会雑誌』51(4): 369-374.
- 総務省統計局(2016)「統計トピックス No.103 統計からみた我が国の高齢者－「敬老の日」にちなんで－1. 高齢者の暮らし」<https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1035.html> (2021年10月アクセス)
- (2021)「統計トピックス No.129 統計からみた我が国の高齢者－「敬老の日」にちなんで－1. 高齢者の人口」<https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1291.html> (2021年10月アクセス)
- 谷川知士・有松しづよ(2021)「高齢者の生きがいづくりと認知機能低下防止に関する教材研究」『南九州地域科学研究所所報』37:73-78.
- 田上優子(2005)「生涯学習としての英語：non-strained learner が示す自律学習」『香住ヶ丘レビュー』11: 157-170.
- Vergheze, Joe, Richard B Lipton, Mindy J. Katz, Charles B. Hall, Carol A. Derby, Gail Kuslansky, Anne F. Ambroise, Martin Sliwinski and Herman Buschke(2003) Leisure activities and the risk of dementia in the elderly. *The New England Journal of Medicine* 348:2508-2516.
- Wang, Hui-Xin X., Weili Xu and Jin-Jing Pei(2012) Leisure activities, cognition and dementia. *Biochimica et Biophysica Acta* 1822: 482-491.
- 吉田甫・玉井智・大川一郎・土田宣明・田島信元・川島隆太・秦羅雅登・杉本幸司(2009)「音読と簡単な計算の遂行による介入が認知症高齢者の日常生活動作におよぼす影響」『立命館人間科学研究』18: 23-32.

【付録】

1 事前に準備した質問

- ・いつから英語を学び始めたか
- ・大人になって英語を勉強し始めたきっかけは何か
- ・これまでの英語を使う機会について
- ・現在の英語を使う機会について
- ・英語を使おうと思うのはなぜか
- ・英語を使おうと思えなくなる時はあるか
- ・英語を使った時の周りの反応はどうか

2 トランスクリプト記号

(.)	短いポーズ	<--->	前後に比べてスピードが速いところ
(..)	少し長めのポーズ	>---<	前後に比べてスピードが遅いところ
(2.0)	ポーズ, カッコ内は秒数	@	笑い
¥-¥	笑いながらの発話	h	呼気・吸気
(---)	状況説明, 名称の説明	:	音の引き伸ばし
()	不明確な発話	[発話の重複の開始箇所
あああ	声が前後と比べて大きいところ	°---°	声が前後と比べて小さなおところ
↑	上がり調子で話されたところ	=	ラッチング, 切れ目なく接続されたところ
↓	下がり調子で話されたところ	?	上がり調子の質問

